

お水取り

中村 龍介

今年の冬は殊の外寒い日が続いたが、三月に入ると春一番が吹き、急に暖かくなった。

ある日、マンションのエレベーターで初老のご婦人と乗り合わせた。顔には見覚えがある。狭い空間でそっぽを向いているのは不自然だ。時候の挨拶が口をついて出た。

「少し暖かくなりましたね」

「助かりますわ。このまま春になってくれるといいですね」

「奈良のお水取りももう直ぐですからね」

「えっ、関西の方ですか？」

「はい、神戸の出身ですが」

「私は宝塚です。お水取りなんて、懐かしい言葉ですわ」

関西では、春の到来を告げるのは奈良のお水取りだというのが、いわば常識となっている。その昔、毎年この時季には、祖母や母がお水取りを待ち望んでいた。

お水取りは正式には「修しゅ二に会」といい、東大寺二月堂にて旧暦の二月に行われる壮大な仏教上の法会だ。二月堂という名前の由来もそこにある。現在の新暦では三月一日に始まり二週間続く。

修二会のメイン・イベントは「悔け過か会」と呼ばれる法要で、悔過とは懺悔のこと。二月堂の御本尊の周囲で過去の過ちを悔い改め、天下泰平、五穀豊穰、万民快樂の願いを叶えてもらうための行事である。御本尊は十一面観音なので「十一面観音悔過会」とも呼ばれる。

この行事のクライマックスは三月十二日の深夜に行われる「お水取り」と「お松明」。十一面観音に合わせて、十一人の修行僧が若狭井わかさいと呼ばれる神聖な井戸からお香水こうずいを汲み上げ、それを観音様に捧げる。その道すがら、巨大な松明を道明と



して掲げ、参集した人々を沸かせる。
関東では「暑さ寒さも彼岸まで」が一般的だが、関西人は春の到来に関しては関東人よりもせっかちで、とても彼岸までは待てないのだろう。
私も、毎年この季節には奈良のお水取りに春の香りを聞く。両親から受け継いだDNAだろうが、関西人としての一種のプライドかもしれない。

(了)

〔二〇一三年三月記 原稿用紙約二、五枚 課題「春の香り」〕